

当協会主催「ラトビア音楽の集い」概要

9月25日（土）13時30分開演 四谷区民ホール

日本ラトビア音楽協会がかねてから準備を重ねていた「ラトビア音楽の集い」の概要が決まりました。当初は、当協会の5周年記念事業として考えていましたが、いろいろの都合で今年になりました。今後も継続して開催する予定で「第1回ラトビア音楽祭」と位置付けています。昨年誕生した協会合唱団「ガイスマ」もこの演奏会でデビューします。この演奏会を通じて、一人でも多くの方にラトビア音楽を知っていただき、当協会にも関心を持っていただくよう願っています。会員の皆さまは是非、揃って来場くださるようお願い申し上げます。

当日は当協会常務理事で北欧・東欧合唱の最高権威である松原千振さんが、ラトビアの音楽について詳しく親しみやすく解説されます。プログラムにはソプラノ、バイオリン、ピアノによるルーツィヤ・ガルータの作品や、「100万本のバラ」の原曲「マレーが与えた人生」も含まれていま

す。この演奏会でデビューする協会合唱団「ガイスマ」も、山脇卓也指揮者の指導が厳しくなってメンバーも本格モードに入っています。
※演奏曲目は6面に掲載

◇

日時：9月25日（土）

開場 13:00 開演 13:30

会場：四谷区民ホール

出演：解説 松原千振（東京混声合唱団 常任指揮者）

久元祐子（ピアノ）

伊藤恭子（バイオリン）

前田勝則（ピアノ）

宮部小牧（ソプラノ）

小田陽子（ヴォーカル）

渡辺ゆき（メゾ・ソプラノ）

佐藤 拓（テノール）

佐々木武彦（バリトン）

日本ラトビア音楽協会合唱団「ガイスマ」 指揮 山脇卓也

入場料：2000円

※曲目など詳細プログラムはチラシをご覧ください。

2010年度「総会・懇親会」2月7日 学士会館

平成22年度日本ラトビア音楽協会総会・懇親会が2月7日、東京一橋の学士会館の宴会場で開かれた。この日はあいにくの強風のため交通の乱れもあり、遅刻者が多く12時開会が若干遅れた。

総会

関口教和運営委員が司会を務め、まず藤井威会長があいさつ。

「音楽立国ラトビア」。1200年に建国以来、日本人から見たら信じられないくらい長く大変な歴史を持つ民族国家がラトビア。その言葉、文化、風習、そして何よりもその音楽が今、ラトビア人の一体感を作り上げている。日本ラトビア音楽協会は、音楽、芸術の交流を通じた市民レベルの両国の好関係を構築していこうという大事な存在であることをここで皆様とともに再確認したい。ラトビアは1991年に独立して以来、目覚ましい発展の中、EU、NATOに加入すること、そしてユーロを通貨と

することが国としてヨーロッパで認められる3点ワンセットだが、もう少しでユーロに入るところにきたところで昨年の世界的金融不況に巻き込まれて大変な金融被害を受けている。しかし音楽立国の中でのラトビア人の魂の基盤の上に立って、何とかこれを克服しようと努力している。当協会も6年目に入った。日ラ両国の芸術を通しての交流も、これまでの諸活動を踏まえて先の目標も見えてきた。

個人的には昨年暮れ、1か月ほど入院したが、もう元気です。新たな気持ちで協会運営に全力を挙げたいと思っている。皆さまのご協力、ご支援をお願いしたい。

総会では浅妻勲会員を議長に指

名、「事業報告・新任人事（加藤晴生専務理事）」「会計報告（遠藤守常務理事・中尾 憲子 協会合唱団 Gaisma会計担当）」「会計監査報告（稲山輝機監事）」が承認された。

懇親会

黒澤幸男常務理事が「協会の明るい未来を祈念して！ プリエカー！」と杯を上げて開宴。まずラトビア共和国ヴァイヴァルス大使が挨拶した。『2009年は世界的不況で日ラ両国にとって厳しい1年になった。その中で、ラトビア首相、国会議長の訪日などもあり活発な交流があったが、大使館は経済的な理由で2人の外交官を帰国させざるを得なかった。今、私とオレグスの2人になったが、懸命に頑張っていくので、皆さまのご支援をお願いしたい。ただ大使館のスタッフは減ったが、ラトビア人が減らないようにと、オレグス家に昨年12月25日に男の子が誕生した（Latvija17号参照）。今年2010年も昨年同様活発な交流の年になると思う。すでに文化大臣の訪日があり、4月には外務大臣も来る。またラトビア交響楽団の日本公演も実現し音楽の面でも活発です。協会の発展と両国の交流がこれからますます深まることを祈ります。』

ここで、司会が関口運営委員から田摩勇理事にバトンタッチ。しばらく歓談ののち、久元祐子理事が「英雄ポロネーズ（ショパン）」とラトビアのピアノ曲小品『春の思い出（バッシ）』を演奏。

スピーチでははるばる長野市から出席の多賀清雄会員が「2008年の協会主催の「歌と踊りの祭典見学ラトビア旅行」に参加して「なんてきれいな国なんだ」といっぺんにラトビアが好きになった。いろいろな面



藤井威会長挨拶「1月に入り元気が、新しい年に全力で頑張ります。」



久元祐子理事が華麗なピアノ演奏

で大変興味深い国なのでぜひまた訪問したい」と話した。

続いて、大学現役在学中の若いガイスマ団員・森川はるか会員が『月の光（ドビッシュー）』を演奏。感性豊かなプロ顔負けの演奏に大きな拍手が贈られた。

スピーチ2人目は協会設立当初から貢献者している八木昌子会員、『今はこういう会を通じてラトビアという国に触れているが、一度はこの素敵な国を実際に訪れたい。』

続いてマークス寿子理事が『今年から活動の本拠をロンドンにするので、ラトビアが近くなる。たびたび訪れてみようと思う。そして英国在住の協会理事として日本とよく連絡を取り合って活動したい』と抱負を述べた。

中締めは桜井珊子顧問が務め、午後2時30分に新年懇親会を終えた。

総会・懇親会出席者

(来賓)

ペーテル・ヴァイヴァルス在日本ラトビア共和国大使、オレグス・オルロフス同3等書記官、NHK東京児童合唱団事務局長 江田篤史氏（会員・順不同）

藤井威、同明子、加藤晴生、同民子、須原信二郎、関口教和、川島泰彦、長澤護、石渡渡康、諸川政子、浅妻勲、多賀清雄、八木昌子、西山智也、中嶋勝彦、石川晴彦、稲山輝機、森川はるか、小俣泰英、マークス寿子、田中享、村山喜一郎、石川了、同弥貴、清水光子、久元祐子、田摩勇、桜井珊子、高仲和子、神部克彦、黒澤幸男、中島護、谷川吉美、吉武優子、遠藤守正、中尾憲子、迫秀一郎、引土慎也（学生）、平野太一（学生）、伊東駿（学生）

以上来賓を含めて43名出席。



ヴァイヴァルス大使を迎える会員



森川はるか会員のプロ顔負けの熱演

2009年事業報告・2010年事業計画

2009年の活動は1月13日、合唱団「ガイスマ」が団員24名で練習を開始したのがスタート。協会にとって意義深い活動で、発足当初考えていた協会のあるべき姿が一通り揃い、当面の活動の形が曲りなりにも示された。

- ①言葉のこと（ラトビア語教室）
- ②歌の力（ガイスマ）
- ③日ラ双方の音楽の交流・発信基地（サロンコンサート）
- ④次世代への布石（指揮者交流プロジェクト）
- ⑤広報の充実

◇

◎ラトビア語教室は、第五期から、それまでの隔週授業を毎週に変え一段と活気づき若さとバイタリティー溢れるグループになった。

◎ガイスマは現在44名の合唱団になり、9月の「ラトビア音楽の集い」でデビュー演奏が決まっている。

◎指揮者交流はすでに3回実施したが、次のプランを検討する時期。

◎サロンコンサートは2008年から年2回開催している。昨年11月には日本と馴染み深い英国ロスチャイルド家直系のシャロットさんが登場、ラトビアの歌、ロスチャイルド家ゆかりの歌（歌の翼になど）、日本の歌を披露し大好評だった。

◎協会ニュース「Latvija」と共に広報の重要なツールであるHPは2008年11月中旬に再構築し、ニュースのスピードをモットーに頻繁な情報発信を目指す。7月末日現在、アクセス数は53000を超えた。

◇

2009年は前年後半に発生した金融危機不況により当協会もその煽りを受けた。2006年3月から2009年5月まで当協会の創設期を支え続けてくださった大鵬薬品工業様の当協会の協会ニュース「Latvija」への広告支援が、同社の経営方針変更により取り止めになった。しかし、発行数・ページ数が減ることはあっても他の方法との組合せなどにより、情報量の減少を防ぎ発行は継続する。

◇

日本とラトビアの親交は急速に深まっている。我々のささやかな活動がその一端を担えたとすれば誠に喜ばしい。2009年は1月にゴドマニス首相が、2月末から3月にかけてダウゼ国会議長の来日、天皇・皇后両陛下に謁見、早稲田大学での「歌と踊りの祭典」の写真展に始まりJALのリーガ直行便実現、数々のビジネスセミ

ナーの開催、音楽界ではラトビアが誇る指揮者マリス・ヤンソンス、ヴァイオリン奏者のギドン・クレーメル等が来日、当協会もショパン弾きで有名なディーナ・ヨッフエや、ソルベイガ・サルガの等の演奏会を後援した。

当協会の会員も各方面で活躍している。会員で「ガイスマ」の指揮者・山脇卓也さんは、同氏が率いる男声合唱団「お江戸コリアーズ」が全日本合唱コンクールで金賞を獲得、在ラトビアの会員、アイラ・ビルジニャさんはリーガ大聖堂少女合唱団をスペイン・トロサでのコンクールで強豪の大人たちの合唱団を退けグランプリを獲得、本年5月の欧州グランプリに出場する。会員ではないがパイプオルガン奏者の浅井美紀さんは日本人ではじめてリーガ大聖堂のオルガンを演奏した。日本の代表的なチェンバロ奏者・家喜美子さんはリガでリサイタルを開催、絶賛を博した。

◇

当協会の会員数は昨年12月末現在で184名。最盛期より10名減少し（退会者5名、物故者5名）、会員の増強が急務となっている。会員の高齢化や不況の煽りで会費収入の減少も懸念される。スポンサーに頼らず財政基盤を安定させるために、本年は300名体制にするための初年度として会員確保に尽力したい。会員確保も単に数合わせにならぬよう、将来を見通して若手の確保に注力しなければならない。幸い当協会には優秀な若手も居り、彼らを積極的に活用したい。

2010年の対外活動方針は

- ①年内に第一回ラトビア音楽祭開催を目指す（ラトビア音楽の集い）
- ②リーガ大聖堂少女合唱団の招聘準備開始（2011年実現目標）
- ③ガルータのカンタータ演奏会実現に向けての活動再開
- ④その他
対内的には過去5年間の活動をレビューし、新しい活動方針の策定準備に入る。（加藤）

藤井威会長が瑞宝重光章授章

日本政府は4月29日付で、2010年春の叙勲者を発表しましたが、わが日本ラトビア音楽協会の藤井威会長（70歳）がめでたく瑞宝重光章を受章されました。羽田孜内閣の時代に内閣内政審議室長として政策調整面に果された業績を高く評価されたも

大盛況だった第5回サロンコンサート

57名が鑑賞、ラトビアからのお客様も来場



左から前田勝則さん、伊藤恭子さん、ヴァイヴァルス大使、宮部小牧さん、前川夏さん

第5回ラトビア大使館サロンコンサートが4月19日（月）に行われ、伊藤恭子（バイオリン）、前田勝則（ピアノ）、宮部小牧（ソプラノ）、前川夏（ピアノ）の各氏が出演、それぞれが素晴らしい熱演で大きな拍手を浴びた。今回は席数を多くしてより多くのお客様を迎える準備をしたが、桑原敏武渋谷区長、上野文藝春秋社会長夫人ら57名が参加する盛会だった。この日はラトビア共和国独立回復宣言20周年と、ラトビア共和国日本大使館創設4周年のお祝いを兼ねる意義深い催しとなった。ラトビア本国から来日される経済界の方々も参加される予定だったが、多くの方がアイスランドの火山噴火に伴う欧州便の欠航で間に合わないアクシデントもあった。ただ一人、ライモンド・ロジタ博士（fmsBALTICS社社主）がこの日到着されてぎりぎり間に合った。

最初に出演された伊藤恭子さんは昨年の当協会創立5周年記念レセプションに出演されてお馴染みだったが、いま売れっ子ピアノスト・前田勝則さんとの共演。ここでしか聴けない組み合わせかもしれない。前田さんは、ソロも一曲披露した。

後半はソプラノの宮部小牧さん（当協会初登場）が、山田耕柝からオペラアリアまでレパートリーの豊

富さを披露し、ガイスマのレパートリーでもあるラトビア曲「三つの星」まで熟達したラトビア語で歌った（伴奏：前川夏）。

参加者が急増したこともあって、演奏後の立食パティエーはとても盛り上がり談笑が続いた。

【演奏曲目】

- 1、伊藤恭子（バイオリン）
前田勝則（ピアノ）
モーツァルト：バイオリン・ソナタ ト長調
ポリエティス：夏至祭（ラトビア）に眠る人々
クライスラー：ウィーン奇想曲
- 2、前田勝則（ピアノ）
シューマン（リスト編曲）：献呈
- 3、宮部小牧（ソプラノ）
前川夏（ピアノ）
山田耕柝：「鐘が鳴ります」「からたちの花」
中田喜直：「ゆく春」「悲しくなった時は」
ヤーニス・ルーセンズ：「三つの星」
モーツァルト：「鳥たちよ、お前は毎年」「寂しく暗い森で」
グノー：歌劇「ロメオとジュリエット」から「私は夢に生きたい」

※出演者のプロフィールは、当協会HPトピックス3月12日付「第5回サロンコンサートのご案内」に掲載。

のですが、同氏が国家の為に果された業績は極めて多岐にわたっています。会員一同からも心からお祝いを申し上げます。

藤井会長は昨年、胃を全摘出する大手術をされましたが見事に全快され、新年に完全復帰宣言をされたことは会員一同にとって大きな喜びでした。これからも健康に留意され、

当協会発展のために、さらに日本・ラトビア友好の一層の推進のために、益々活躍されるようお祈りいたします。本当におめでとうございます。



芝居小屋の回想

黒沢 歩

会場までは決まって急ぎ足。着いたらブーツからパンプスに履きかえ、コートと一緒にクロークに預け、鏡の前でなんとなく整えて席に着く。バッグからオペラグラスを取り出してざわめく会場にさっと視線を回し、「ほら、ボックス席の真ん中に大統領夫妻が子連れよ」、「端のほうには噂の政治家が新しい恋人を連れね」、「暴露本を書いたスキャンダラスな弁護士同伴者のドレスを見て」などと、肩を寄せ合ってひとしきりの噂話。その晩に会場に同席する有名人、知人を確認しながら落ち着くと、手元のプログラムに目を走らせて今日の監督や役者、指揮者に衣装担当を確認する。そのうちに三つ目のベルが鳴って会場の明かりがゆっくりと消える。それは3秒間くらいだろうか。その間にざわめいていた会場がしんと静まりかえって、耳を澄ませて舞台を見つめる。日々の暮しに区切りをつけるような、この不定期な瞬間が私はこのうえもなく好きだ。1991年のモスクワからはじまった私の舞台・音楽鑑賞記録は、多いときに年間150回を超える。

観たくてもチケットの入手が困難を極める劇場は、ソ連崩壊直後のモスクワなら「巨匠とマルガリータ」で人気を博したタガンカ劇場が有名だが、それよりも芝居小屋という異空間の迫力を体感したのはポクロフスキー音楽劇場やユーゴザパドナヤ劇場、そして青年劇場という、どれもねずみの巣穴のように小さく暗い、それだけでわくわくする空間だ。ここでいう劇場とは、単なる箱モノではなく専属の劇団を有する劇場のことである。だから、劇場はその劇団を率いる監督が特色を作りだし、



それを好みとする客層が固定化してくる。

◇

リーガでも当初はロシア劇場に通い詰めていた私も、次第にラトヴィア語の芝居に夜の時間を譲り、「新リーガ劇場」という古い劇場だけれど斬新な演出の小舞台の虜となった。1990年代はシェイクスピアやワイルドはもちろん、三島由紀夫の「サド公爵夫人」といった外国戯曲が多かったが、近年はロシア近現代やラトヴィアの新作に比重が移っている。ここは監督のマラー・キメレやアルヴィス・ヘルマニス手がける舞台なら、チケットが1年先でも入手困難なのが珍しくないほど注目の劇場となって久しい。

ヘルマニス監督は、個性派の役者たちの自主性に演技を任せアドリブ的な手法の「ラトヴィア人の物語」、現代の年金者の暮しの無言劇「長い人生」、1970年代のソ連の若者の諸相の無言劇「静けさの音」などでここ数年来の国内の舞台芸術賞を総なめにしてきたほか、ロシア、ドイツ、ギリシャ、ポーランドその他の演劇賞を受賞して、ロシアと欧州の舞台にも活躍の場を広げている。彼の率いる劇団は韓国まで足を伸ばしたのだから、願わくばいつか日本でも観てみたい（はるかにチケットが取りやすいことだろう）。リーガには「シアター展望台」という芝居小屋も現れて、冬の長い夜は観劇の選択に幅を広げた。リーガでの観劇後は「シアターバー」やカフェ「オジリス」でひとしきり感想を言いたい放題してから、夜道を歩いて帰る。それが東京だと、無表情に疲れた群れにひしめく駅と電車で埋もれて、現実には強引にひきもどされる。この現実のなかで思い出すリーガは、夜がひととき美しい。それは、まさにヘルマニス監督曰く「ロマンチックに透明で繊細な、翻訳不可能なラトヴィアの風景」なのである。

音楽と私(2)

マークス寿子

早稲田の学生時代、覚えた歌は「都の西北」だけだったといったら、少し大げさだが、とにかく音楽に縁のない生活だったことは間違いない。その「都の西北」も、私の場合は神宮球場で覚えたの



でなく、60年安保が迫ったその当時、誰もが「安保反対」のデモに加わって、そこで覚えたのだった。他大学の学生たちは労働歌や全学連の歌を歌ったのだが、早稲田の学生はデモで「都の西北」を歌ったのである。その頃、歌声喫茶もさかんで、私も連れていかれたが、深刻ぶって歌うロシア民謡には馴染めなかった。

当時、わが家にはステレオ・セットもなく、音楽といえば、ラジオから流れてくるものだけであった。「女だてらに早稲田の政経学部に入るなんてとんでもない」と怒った父親に対し、母は「ちゃんと家事もやらせます」と言ってなだめたらしく、私は毎朝、大学へ行く前に家中の掃除をさせられた。様々な事情で、私たち一家はとてつもなく大きい総ひのきの日本家屋に住んでいて、廊下や玄関の板の間を雑巾でピカピカに磨くのは大仕事だった。しかし、日曜日の朝には廊下や板の間を磨きながら、NHKのクラシック番組を聞くのが楽しみだった。掃除の手を休めて聞きほれたのはドイツ歌曲だった。今も忘れないのは、フィッシャー＝ディスカウの「冬の旅」である。伴奏者スーゼーの名前まで覚えるほど夢中になった。今はイアン・ボストリッジの「冬の旅」が好きだ。

その頃から歌曲やオペラ??つまり、人間の声を楽器にした音楽が好きになったような気がする。ヴェルディやプッチーニのアリアは美しく美しく、ドラマチックで大好きだったが、その実、オペラそのものを好きになったのは、後にロンドンに行ってからである。その前はどちらかと言うと、オペラそのものは嫌いだったと言ってもいい。日本にいた頃、一度だけ藤原歌劇団の「椿姫」を見たが、日本人が赤毛の西洋人に化けようとしているのが、あまりにも不自然でせっかくの音楽の興を殺いだ。もったい

けなかったのは「蝶々夫人」だった。これはテレビで見たのだが、メトロポリタン歌劇場の有名なソプラノ歌手が蝶々夫人を演じたのだが、相撲とり並みのアメリカ女性が着物の前をはだけて着て「ある晴れた日に」を歌ったのがあまりにも醜かった。そして、この可憐とはほど遠い蝶々さんが息子をアメリカ人に渡して自殺する結末に、まさしく「鳥肌が立つ」（本当の意味で）ほどいやだった。「蝶々夫人」だけはいやと、以来思い込んでいたが、先日テレビで放映されたメトロポリタン・オペラの「蝶々夫人」は異なった。私の大好きな映画監督ミンゲラのオペラ初演出とのことで、写実的な日本風ではなく、文楽のような人形を用いて幻想的な雰囲気ですてきに素晴らしかった。

だが、私が本当にオペラに夢中になったのはコベント・ガーデンへ通うようになってからのことである。

◇

マークス寿子さんのこと

マークス寿子さんが、日本・英国の半分ずつの生活から英国定住を決断され、3月末に離日されました。この原稿は置き土産ですが、是非(3)以降も期待したいところです。マークスさんの最近の著書は殆んど読んでいますが、たまたま古本屋で文庫本の「英国貴族と結婚した私」を発見、一夜で夢中で読了しました。こんなに興奮して読んだのは久しぶりで、凄く女性であることを改めて痛感。本のキャッチコピーは「1971の秋、研究留学のため単身ロンドンに渡った著者は、やがて英国貴族と結婚、男爵夫人に…。日本国籍を捨て、なまの人間関係のなかで、運命を積極的に受け入れ、新しく人生を切り開いてゆく一女性の爽やかな半世紀」。私は最後の「爽やかな」の前に「痛快で」を挿入したいと思いました。是非ご一読を。中公文庫です。(徳)

Regards from Latvian NSO



徳島 椎野寿子

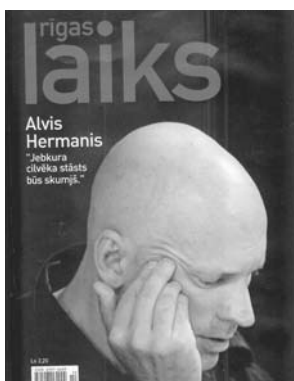
新聞広告でラトビア国立交響楽団の高松演奏会を見つけた。夫の友人で四国新聞社の山下淳二さんをお願いしたところ最高の席をとっていただけだ。1月24日日曜日、楽団にKonfektes（お菓子）をおみやげと思い、おはじきの形をした飴を持っていった（もちろん「Latvija」の中から英文の載っているコピー5枚と、私の英語とラトビア語の手紙も添えて…）。

指揮者の西本智美さんに「もし今留学先を選ぶのだったら、リガを選

ぶかも知れない」と言われたラトビア国立交響楽団の演奏は素晴らしいものだった。休憩の間も、ハーブとビオラの方が舞台上で練習をされていて、古き良き時代の日本人の真面目さを見たようだった。演奏が終り、西本智美さんの顔には全てを出し切った満足感が溢れていた。

2月9日午前11時15分、Tour ManagerのReinis Galenieks氏からお礼のメールを受け取った時は、嬉しさでびっくりし、ますますラトビアが好きになりました。

※NSOはNational Symphony Orchestra の略



リーガ劇場でアルヴィス・ヘルマニス監督が手掛ける芝居のチケットは1年先まで入手困難

会 員 近 況 短 信

合唱とラトビアと私

八千代松陰高等学校合唱部顧問
山本 慎一

私が顧問を務める高校の合唱部では、6年ほど前から、ラトビアの合唱曲に毎年取り組んできました。さまざまなジャンルに挑戦しています。「風よ、そよげ」は、最初にした曲ですが、今では部の愛唱歌になっています。ラトビア曲をプログラムに入れると、初めて聴いた人からは、「旋律が美しい」「知らない歌なのに懐かしい気がする」。かの国に行ったことのある人からは、「自然と風土を思い出させてくれた」などと好評を得ています（曲のおかげですが）。部員も、音楽だけではなく、国や文化そのものに興味をもつ者が少なくありません。

先日、卒業生のIさん（女性で大学院生）が、ラトビアに留学するという話を耳にしました。おそらく、協会の方々にお世話になったのだらうと思い、連絡をとりました。卒業生が、合唱をしていることだけでも、私には嬉しいことです。彼女は、大学で合唱も続けていましたが、「ラトビア」がキーワードとなって、専攻の学問とも結びつき、新しい世界や人との関係を構築していったのです。これは、この上ない喜びです。

日々、雑事に追われつつも、このように人と人（あるいは国）をつなぐ輪の中に、私も少し役立ったことに、感激しています。Iさんが、誰かにラトビアの音楽や文化を紹介してくれるだろうと期待しています。部室には、今も、生徒が貼ったラトビア紹介の新聞記事があります。

ラトビアへ留学します

ラトビア語教室 伊藤 えりか



ラトビア語教室の伊藤えりかです（筑波大学4年）。大学の推薦を得て、8月にラトビア大学の夏期講習(EILC)に参加します。大学での専攻は人間の音声、発話の研究で、音声学によ

るラトビア語の研究が留学の主目的ですが、ラトビアの基礎知識（文化や歴史）を身につけ、現在のラトビアを体験し、音楽活動にもぜひ参加したいと願っています。ナマの言語・音楽・文化その他を体験するには留学しかないと思いました。

ラトビアという国に興味を持ったのは、八千代松陰高校合唱部で山本慎一先生が外国語曲をたくさん紹介してくださり、また練習させていただきおかげで、それまで抱いていた外国語への苦手意識がなくなりました。当時は日本語の曲をたくさん歌いたかったのですが、様々な国・言葉の合唱曲に触れて「言葉も音楽のひとつなのだ」と思うようになりました。中でも特に強く惹かれたのはラトビア語・ラトビア音楽でした。ラトビア音楽の魅力は、言葉と音楽が一心同体になっているところで、私にはラトビア語の音楽が一番体に合っています。歌いたいことは音楽が表現してくれ、音楽が言葉を乗せる感じです。いつでも、うまく発音できたときは、うまく歌っているときでした。私はまだラトビア語は歌ったことがあるだけです、きっと会話でも同じだと思います。辞典にある「ラトビア語は音楽的である」の一言に尽きる気がします。

将来は現在の専攻である音声学を活かせる仕事に就きたいと考えています。もちろん、ラトビア語・ラトビアに関する仕事にも興味があります。今回の留学で、将来に向けての足がかりを得られるのでは、という期待もあります。貴重な体験ですから、毎日充実して過してきます。

日本ラトビア音楽協会の皆さま、今後ともよろしく願いいたします。

遣唐使船

九州ラトビア支援の会会長
山本 徳行

角川文化振興財団の角川歴彦理事長が、奈良の平城遷都1300年を記念して日中文化交流史の重要なシンボルであった遣唐使船を再現し上海万博に出展することになった。私は遣唐使船が日本沿岸の古(いにしえ)の航跡を辿り、大阪から上海までの安全運航のアドバイザーとして再現プロジェクトに参加した。当時の遣唐使達は向学心に燃え、全長30m幅7mの木造船で、竹製の帆を揚げ

風・潮任せと神頼みで、風のないときは櫓を漕ぎ危険を冒して渡航し、中国で学んだ学問や文化を命がけで持ち帰り、現代でも日本文化の隆盛に貢献している。角川理事長が当時を偲び遣唐使船を再現して日中文化交流と上海万博の成功に貢献する夢を抱いていると聞き、私は大いに共感して積極的に協力した。再現した遣唐使船は鋼製で板張り、見かけは昔の面影が偲ばれる素晴らしい景観だ。



門司入港中、海上保安庁の巡視船による歓迎放水(右)と、遣唐使船上の著者



大使、悪天候の中、余裕の完走(東京マラソン)



ヴァイヴァルス駐日ラトビア大使の4年連続フルマラソン挑戦(東京マラソン)は、一般紙でも大きく取り上げられましたが、2月28日、午前9時5分、生憎の悪天候の中を、35000人の一人としてスタートし、4時間36分33秒で余裕の完走を果たしました。オレグス書記官も10キロの部を55分でゴールしましたが、

大阪では華やかな前夜祭・出港式を挙行し、倉橋、門司、博多、五島の青方、福江、長崎に寄港し各地で盛大なイベントで歓迎され、成功裡に古の航跡を辿ることができ満足している。上海万博には漕ぎ手の若者を連行し、ジャパン・ウィーク6月11・12日に海上でのデモンストレーションに向け準備中で、プロジェクトの成功を祈念すると共に喜寿を笑顔で迎えたいと願っている。

大使館を挙げて、日本のビッグイベントに参加し日本国民の中に積極的に溶け込もうとする姿勢には頭が下がる思いがしました。

完走後、大使は、「終始快適な気分余裕をもって走った。自己ベストには3秒及ばなかったが、あの悪天候を考えるととても良い結果だったと満足している。今年は充分なトレーニングを重ねたことが実ったと思う。100万を超える人々の声援を受け、本当に充実した楽しい1日だった」と爽快な気分です。

激務に追われて練習不足だったというオレグス書記官の10キロ完走も見事で、「東京の素晴らしい風景を楽しみながら走った」とこちらも余裕の表情でした。

真実のマダマ・バタフライ

前号で紹介した岡村喬生副会長の国際改訂版「マダマ・バタフライ」初演に関して、3月1日付日本経済新聞文化面に岡村氏自ら執筆した原稿が大きく掲載されました。

「1959年、初めて蝶々さんのおじの僧侶役で出演した時、歌詞や情景描写の間違いの多さに日本人として啞然とした。以降、20年間欧州で活躍する間、何度も屈辱的な思いをした。こんな間違いはいつか正さねばならないと、心に誓った」という岡村氏の執念が実り、いよいよ来年(2011年)8月に本場イタリアで、原作パリ版台本と書きの日本誤認を世界初に訂正した版での世界初演が決まっています。演出は勿論岡村氏。なお主役の蝶々さんら日本人キャストのオーディションが5月7日に行われ、その盛会ぶりはテレビも紹

介されました。

阿佐ヶ谷ジャズ「応援してねコンサート」

精力的にライブ活動を続ける小田陽子さんが、今年も秋の阿佐ヶ谷ジャズストリートに出演しますが、7月3日、阿佐ヶ谷聖ペテロ教会で開催された「応援してねコンサート」に出演、満員の聴衆を集めて盛り上げました。今年はゴスペルの第一人者、森崎ペラさんと共演しました。本番に少しでも資金面を支えようというボランティアコンサートでした。

小田さんは7月7日に、9月で幕を閉じる品川パシフィックホテルのライブに出演、すっかりお馴染みになった30階ラウンジ「ブルーパシフィック」での楽しいライブに有終を飾りました。



トピックス

北條陽子さんがアットホームなリサイタルに出演



国内外で活躍を続ける実力派ピアニストの北條陽子さんが3月27日午後、杉並三田会の音楽愛好家グループ「Musikverein」3月例会でピアノリサイタルを開いた(荻窪・荻芸館)。会場は椅子が50余のアットホームな雰囲気、開演前からオーランド・ケイオーボーイとご夫人が満席になった。この会場にはヤマハとプレイエルの2台のグランドピアノがあり、北條さんは楽しいトークを入れながら演奏曲目によって2台のピアノを引き分けるという贅沢なリサイタル。

プログラムは前半に北條さんも親しくしている作曲家・中島はるの「くもの糸のはしご」曲集とラトビ

アでも絶賛を博したという「黒髪幻想曲」に続いて、ベートーベンのソナタ「熱情」。後半ではラトビアの作曲家・ベレーツィスの「ピアノ組曲4番」、ムスルグスキー「展覧会の絵」と極めて多彩な曲目が続いた。曲目解説を兼ねたトークに北條さんの人柄がにじみ出て、本当にアットホームなサロンリサイタルだった。小さい体から弾き出するような強力で軽快なタッチ、繊細極まりないフレーズ・響きと、深い音楽性が聴く人の心を洗い、耳の肥えた聴衆もただただうっとりして感嘆している様子が伺えた。

ベレーツィスを演奏する前に、北條さんは小国ラトビアが如何に音楽性豊かな国であるかをラトビアでの体験を交えて感動的に話し、とても嬉しい気持ちになった。展覧会の絵では、実際のスケッチを見せながら作曲家の感性の豊かさを言葉でもしっくり伝えた。生で初めて聴いた中島はるの作品はトビュッシーと日本人の心が一体化したような素敵な演奏、ベートーベンは心の底まで熱くなった。何とも贅沢な2時間だった。(徳)

前田二生氏指揮 新東京室内オーケストラ 第25回定期演奏会



前田二生当協会会員が常任指揮者を務める新東京室内オーケストラの第25回定期演奏会を聴いた(5月19日・紀尾井ホール)。1990年に開催した第1回演奏会から毎回、「ウィーン古典派の系譜」と題して、ひたすらウィーン古典派の流れをくむ作品を紹介し演奏し続けた功績は限りなく大きく、称賛に値するライフワークと言える。背景にウィーン楽友協会資料館館長ピーバ博士と前田氏の強い絆があった。

今回は、ウィーンでも極めて特徴的な19世紀の約30年間に生まれたシューベルト、ベートーベン、ヨハン・シュトラウス1世、パガニーニの作品に焦点を集めた内容で、とりわけ興味深かった。この日のプログラムにピーバ博士が寄稿した解説によると、ピーターマイヤーと呼ばれ



るこの時代は、フランス革命にはじまるヨーロッパの戦乱がウィーン会議(1815年)でやっと終結した後の約30年間で、まだ警察が厳しい監視体制を続けるなど混沌としていた。こんな中で音楽愛好家は警察の監視下で開かれるコンサートより、一般家庭に客を招いて自由な雰囲気の中で演奏を楽しんだ。ソロや室内楽はともかく、オーケストラの場合は、充分なスペースを確保するために、客は演奏の部屋の中のみならずトアを開放して隣室にまで広がって座ったり立ったりして聴いたという。作曲家たちはコンサートホールのためではなく、こうしたプライベートな集まりの為に作曲を続け、これらがピーターマイヤー時代の音楽と呼ばれる。後世、コンサートホールではあまり演奏されない由縁でもある。



この夜、客席を埋めた聴衆はこん

な背景を熟知していた。私自身も、19世紀にタイムスリップして、あたかも当時一般家庭で行われていたサロンコンサートのアットホームな雰囲気の中で音楽の素晴らしさを満喫した気持ちになった。オケのメンバーはそれぞれが一流の演奏家で紀尾井ホールに響くアンサンブルは何とも心地良かった。大ホールで開かれる大オーケストラの演奏会とは全く違った親近感と心豊かさを味わった。丹精で折り目正しい指揮を続ける前田氏との深い信頼関係がひしひしと伝わってきた。メロディーラインが何とも美しく奏でられた。聴衆の表情も良い音楽を満喫できた満足感がみなぎっていた。

この日の演奏曲目はパガニーニのバイオリン協奏曲2番「ラ・カンパネラ」(Vn藤原派雄)、シューベルトの第5交響曲、ベートーベン「アテネの廃墟」など。同じプログラムで6月14日にウィーン楽友教会でも演奏された(スロバキア国立ジュリナ室内楽団)。なお、第26回定期演奏会は来年(2011年)4月13日(水)紀尾井ホールでの開催が決まっている。(徳)

絶賛博した板垣直忠さん 78歳バースデーコンサート



4月10日に福島市音楽堂大ホールで行われた板垣直忠さん(当協会理事)の78歳バースデーコンサートは、喜寿を過ぎたとは思えない力強い声で全18曲を歌い切り絶賛を博した。地元紙も写真入りで大きく報道した(福島民報=朗々たる美声披露、福島民友=美しいメロディー・伸びやかな歌声で魅了)。尾形秀重日本教育音楽協会福島県支部長は、福島民報紙に「板垣直忠氏演奏会に寄せて」と題した長文を寄稿し、「感動、ブラボー、われわれの生き方の指針となったコンサート」と賛辞を贈った。板垣さんは当日のプログラムに「音楽の絶えない家に育ち、戦前から戦中戦後と78年間音楽と

共に生きた幸せと、素晴らしい先輩、良い恩師への感謝を述べ、日本語を美しく大切に歌うことを教えてくださった故酒井弘先生の門下生として、恥ずかしくない演奏をしたい」と結んだ。編集室からも心からお祝いを申し上げ、ますます若々しく活動されるよう期待したい。(徳)

男声合唱団「ローガンDX」 18年の活動に幕



平均年齢72歳余の17人による男声合唱団「ローガンDX」が18年の活動に幕を閉じました。7月18日に津田ホールで開催した「さよならコンサート」に酷暑の中を多数ご来場頂き大きな声援と過大なご高評価を賜り、本当にありがとうございました。メンバー一同、極めて充実した気持ちで、心から楽しんで歌い終えることができました。

今回はチケットが一月前に完売になり、当日は満席でステージ上まで椅子を並べることになって、大変ご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げます。



“本当に、本当に、ありがとうございました”リーダー・徳田浩

「18年間、ほぼ同一メンバーで演奏活動を続けてきましたが、結成当初はそれぞれがそれぞれの世界で活躍するナイスミドルだったメンバーも、18年の経過と共にすっかり高(老)齢化しました。病氣と闘いながら練習に参加するメンバーも出てきました。当初からこのメンバーで歌えなくなった時が最後だという暗黙の認識がありました。そして今年、いよいよラストコンサートを決意した次第です。

月2回の練習を通して17人の固い友情が素晴らしい一体感を生みました。時には激しく“個”と“個”をぶつけ合いながら、英国紳士から生まれたラグビーの合言葉「One For All, All For One」を、日本の素敵な紳士たちが積極的に実践してきました。この素晴らしい宝物をこれからの人生に生かしていきたいと念じています。長い間のご声援、本当に、本当にありがとうございました。」

見事だった東京六連OB合唱演奏会

総出演者数340余名の盛会 現役へ熱いエール

第6回東京六大学OB合唱連盟演奏会が7月3日、東京文化会館大ホールで行われ、総出演者数340余名の盛会だった。近年は現役部員数が激減しているだけに、各OB合唱団は人数・演奏曲目とも総力を結集して臨み、「現役も頑張ってくれ、伝統の灯を絶対消してはならないぞ!」と熱いエールを送るような熱演を繰り広げた。

この演奏会は1999年にスタートし、以降隔年で開催を続けている。今年で幹事校が一巡したことになるが、開催の都度、ホール、会計、ステージ、印刷、フロント、幹事をそれぞれの合唱団が分担し合う、見事な一体感で開催してきた。これまで、昭和女子大人見記念講堂（第1回）、東京芸術劇場大ホール（2回・5回）、東京文化会館大ホール（3回・4回）で開催した。現役や若手OB諸君に、この素晴らしい伝統をしっかりと守って欲しいと強く思った。（徳）

1、明治大学グリークラブOB会合唱団駿河台倶楽部（46名）

「男声合唱のための組曲「ゆうべ、海をみた」」

作詞：落合恵子 作曲：荻久保和明 指揮：渡辺利雅 ピアノ：高杉里香

2、慶應義塾ワグネル・ソサイエティーOB合唱団（88名）

「シベリウス男声合唱曲集「六つの男声合唱曲」」

指揮：大久保光哉

3、立教大学グリークラブOB男声合唱団（52名）

「マドリガル〜男声合唱、打楽器、ピアノのために〜」

作曲：新実徳英 指揮：高坂徹

ピアノ：久邇之宜

パーカッション 大熊理津子、小山有紀

4、東京大学音楽部OB合唱団アカデミカコール（69名）

「四つの祈りの歌」

作編曲：藤原義久 指揮：三澤洋史

ピアノ：三木啓子

他にフルート、オーボエ、クラリネット、ピオラ、コントラバス、パーカッション

5、法政大学アリオンコールOB会・オールアリオン（41名）

「合唱のためのコンポジション」

作曲：間宮芳生 指揮：田中信昭

6、早稲田大学グリークラブOB会・稲門グリークラブ（46名）

「男声合唱曲・海の構図」

作詩：小林純一

作曲：中田喜直

編曲：福永陽一郎

ピアノ：大室晃子

※各大学の詳細は協会HPをご覧ください。

記念賞を受賞した。30000字の大作、全文をHPに掲載した
今年の夏は修士論文取材のため、1ヶ月間ラトビアに滞在し、様々な体験をした。レポートはHPに掲載。

◎東京に「リガコレクション」オープン

東京中目黒に7月23日にラトビア物産品の店「リガコレクション」がオープン。店主は川島容次郎氏で商品の紹介・販売だけではなく、ラトビア文化の紹介、日本ラトビアの文化交流にも役立ちたいと意欲的。お披露目にはヴァイヴァルス大使も出席して祝意を表した。

◎東京外国語大サマースクール&オープンアカデミー「ラトビア語」

当協会「ラトビア語教室」講師・堀口大樹さんが、今年もサマースクール（8月16日～27日）の講師を務める。今年は新たにオープンアカデミー（8月30日～9月17日）もスタートする。詳細はHP参照。

協会合唱団「ガイスマ」の演奏曲目

当協会の合唱団「ガイスマ」は9月25日（土）午後、四谷区民会館で開催される「ラトビア音楽の集い」デビュー出演し、これまでの練習の成果を披露します。当日演奏する曲目は次の8曲でももちろん全てラトビア語による演奏です。メンバーはさすがにコーラスのベテラン揃いで、ようやくこの合唱団のトーンが少しずつ見えてきました。どうかご期待ください。指揮は山脇卓也さん、ピアノ伴奏は前田勝則さんです。

①Dievs sveti Latviju（国歌）

②Dziedot dzimum dziedot Augu

（歌いながら生まれ、歌いながら育った）

③Rīga dimd!（リガがとどろく）

④Sasala jurina（凍った海）

⑤Gaismas Pils（光の城）

⑥Manai dzimtenei（わが祖国に）

⑦Pacel galvu balta mat!

（白髪のお母さんよ、頭を上げて）

⑧Put vejni（風よそよげ）

ラトビア人団員エリーナさんの送別会

ラトビア人メンバー（アルト）のエリーナ・グラヴィーテさんが帰国することになり、去る3月8日の練習終了後、ワンコイン（500円）送別パーティーが行われました。エリーナさんは09年6月、EU主催の若手ビジネスリーダー育成プログラムに参加されたご主人のユルジスさんと

共に来日。本国で合唱経験があり、フルートを吹くなどの音楽愛好家で、社交的で明るい人柄もあってすぐメンバーに同化し強い友情が生まれました。短い期間でしたが、ラトビア語の発音を教えたり、クリスマスにはラトビアのクリスマスソングを持参したり、ガイスマにとってもいつまでも記憶に残る足跡を残したメンバーでした。メンバーそれぞれが記念撮影したり、プレゼントを贈ったり、中にはラトビア語で話しかけたり、素敵な談笑のひと時でした。最後に全員が寄せ書きをした色紙をプレゼントしました。この日の練習の最後は彼女も大好きという「Put vejni」を一緒に歌い感動的でした。

最後にエリーナさんは「ラトビアの音楽文化にこんなに興味を持ってくくださる多くの方々とお会いできて本当に嬉しい。皆さんがラトビアに演奏旅行にいらっしゃる時は是非お手伝いさせて頂きたいと思っています。半年間はあっという間でしたがとても幸せでした。ありがとうございました」と挨拶しました。



エリーナさんを囲んで談笑するガイスマのメンバー

ミニ・ニュース

◎ラトビア映画「小さな泥棒たち」

日本と欧州連合（EU）の市民交流の促進を目的とした「EUフィルムデーズ2010」で5月3日、ラトビア映画「小さな泥棒たち」（日本語字幕付き）が東京で上映され好評を博した（東京国立近代美術館フィルムセンター）。

ストーリーは父の失業でローンが返済できなくなった家族を家から追い出した銀行に仕返ししようと、5歳の少年ロビスと姉のルーイザは強盗を企てる。無敵な二人に不可能はない！ 世界各地で好評を博した作品で日本初公開。家族で楽しめる映画。6月3日に福岡でも上映された。

◎森川はるかさんの卒論が最優秀賞

前号で詳報した森川はるかさん（現立教大大学院）の卒論「ラトヴィアに於ける歌・合唱?祭典及び生活を通して」が史学科最優秀論文の栄に輝き、併せて同大文学部百周年

情報断片

♪…悲願とも言うべき会員音楽家による「ラトビア音楽の集い」がいよいよ実現します。基本的なコンセプトについて、実行委員会の間で激しい議論の応酬がありましたが、最終的には、素晴らしいラトビアの音楽を一人でも多くの方に知って頂けるコンサートにしようという点で一致しました。加藤専務理事の執念を感じさせる強力な推進力が決め手になりました。日本に於ける初の「ラトビア音楽祭」と位置づけ、来年以降も継続する決意です。その為にも初回は是非成功させたいと念じています。皆さまの積極的なご来場とご声援をお願い申し上げます。

♪…会員関係のコンサートが続きます。ガイスマの指揮者・山脇卓也さんが指揮する男声合唱団「お江戸コ

ラリアーズ」が8月8日に杉並公会堂大ホールで第九回定期演奏会を開きました。昨年、金賞を獲得した全日本合唱コンクールに今年も挑戦します。「桜楓合唱団」は11月30日にすみだトリフォニー大ホール、「桜友女声合唱団」は12月4日に紀尾井ホールで、それぞれ意欲的な定期演奏会を開きます。詳しくはHPに掲載します。

♪…財政的な理由でLatvijaの発行回数とページ減を余儀なくされ、今号も多くの情報を6ページに集約しました。HPはお蔭様でアクセスが増えています。今後とも充実に努力しますので是非定期的にご覧ください。今年は大変な酷暑の夏で私も少々バテ気味ですが、皆様も十分ご自愛されますよう祈ります。9月25日に四谷区民ホールでお目にかかりましょう。（徳）